

社説

接種後の重い副作用が問題化している子宮頸がんワクチンについて、厚生労働省は積極的な接種の呼び掛けを一時中止した。早急に副作用情報を集め、リスクを国民に知らせるべきだ。

子宮頸がん接種

T20  
「骨をハンマーで殴られているような強い痛み」

「けいれんが全身に広がり、寝かせると魚が跳びはねるような激しさ」

副作用とみられる症状に苦しむ娘を語る親たちは悲痛な表情だ。痛みが長く続き、歩

受診者任せでは困る

行困難になる人もいる。こんな重い副作用報告が相次いでいる。

子宮頸がんは年間約九千人がかかり、約二千七百人が亡くなる。

性交渉によるウイルス感染が原因で、ワクチンで予防できるがんといわれる。

厚生労働省は三年前から接種への助成を始め、今年四月から小学六年、高校一年の女子を対象に無料の

定期接種化したばかりだ。

ワクチンは海外で広く使われているが、知られていなかった重い副作用報告が続いている。国内ではこれまで約八百六十万回接種されて副作用報告は約二万件、うち三百五十七件が重篤だった。

この事態を受け厚生労働省は、積極

的な接種の呼び掛けを一時中止することを決めた。副作用の実態を

解明し情報提供ができるまでの対応という。

インフルエンザや風疹のように一気に広がりにくい疾患という判断もあつたらう。

接種希望者への配慮から定期接種からは外さないとしているが、

これでは接種の判断を本人、家族

や医療現場が迫られることになり、混乱するばかりだ。

対策で忘れてならないのは、検診の重要性である。子宮頸がんの多くはがんになる前の段階やごく初期のがんの段階で見え、体

への負担が少ない治療で済む。二十歳から二年に一度の検診が勧められている。

ワクチンががんの原因となる全ての種類のウイルスに効くわけではない。接種しても検診を受けることが大切だ。

だが、受診率は四人に一人と、欧米に

比べ低い。米国では十八歳以上の八割を超える。

学校などでの集団検診や、検査担当者を女性にするなど受けやすい工夫も要る。

市町村が検診事業を行っている。積極的に利用してほしい。厚生労働省はワクチンによる予防と併せ

検診の普及にも、さらに力をいれ